

2022.9.18 年間第 25 主日

富は不正にまみれたもの、それを真の友人を得るために使え

ルカによる福音書 16:1-13

「ある金持ちに一人の管理人がいた。この男が主人の財産を無駄使いしていると、告げ口をする者があった。そこで、主人は彼を呼びつけて言った。

『お前について聞いていることがあるが、どうなのか。会計の報告を出しなさい。もう管理を任せておくわけにはいかない。』管理人は考えた。『どうしようか。主人はわたしから管理の仕事を取り上げようとしている。土を掘る力もないし、物乞いをするのも恥ずかしい。そうだ。こうしよう。管理の仕事をやめさせられても、自分を家に迎えてくれるような者たちを作ればいいのだ。』そこで、管理人は主人に借りのある者を一人一人呼んで、まず最初の人に、『わたしの主人にいくら借りがあるのか』と言った。『油百バトス』と言うと、管理人は言った。『これがあなたの証文だ。急いで、腰を掛けて、五十バトスと書き直しなさい。』また別の人には、『あなたは、いくら借りがあるのか』と言った。『小麦百コロス』と言うと、管理人は言った。『これがあなたの証文だ。八十コロスと書き直しなさい。』主人は、この不正な管理人の抜け目のないやり方をほめた。この世の子らは、自分の仲間に対して、光の子らよりも賢くふるまっている。そこで、わたしは言うが、不正にまみれた富で友達を作りなさい。そうしておけば、金がなくなったとき、あなたがたは永遠の住まいに迎え入れてもらえる。」

「ごく小さな事に忠実な者は、大きな事にも忠実である。ごく小さな事に不忠実な者は、大きな事にも不忠実である。だから、不正にまみれた富について忠実でなければ、だれがあなたがたに本当に価値あるものを任せるだろうか。また、他人のものについて忠実でなければ、だれがあなたがたのものを与えてくれるだろうか。どんな召し使いも二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どち

らかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」

説教

メチャクチャなはなしに聞こえます。でも、愉快なことに聖書には時々こんなムチャ話が書いてあります。きょうのイエス福音は2つのムチャ話で構成されています。

まずは管理人の話、彼は金持ちに雇われている執事。日本風にいえば番頭さんで、店のきりもりを任されている、雇われ人の中ではトップです。その管理人の金銭使い込みが誰かの告げ口よってご主人にバレます。今風にいえば内部告発です。そこで首を覚悟した彼は手を打ちます。それならば負債者に恩を売り再就職先を確保すればいい。彼はさっそく負債のある者をよびつけ借金減額を勝手にはじめます。

管理人は主人に借りのある者を一人一人呼んで、まず最初の人に、『わたしの主人にいくら借りがあるのか』と言った。『油百バトス』と言うと、管理人は言った。

『これがあなたの証文だ。急いで、腰を掛けて、五十バトスと書き直しなさい。』

ルカ 16:5-6

こんな悪党はどこにでもいるようで、ありそうな話です。ふつうの説教ならここで悪党をこらしめて終わるところですが、そうはなりません。

主人は、この不正な管理人の抜け目のないやり方をほめた。ルカ 16:8

主人は管理人の不正を咎めることなくなんと褒めます。これではご主人さまのほうがメチャクチャではないですか。ふつうのはなしなら主人が怒ります。あるとき、イエスは神は富を自分のためだけにつかう金持ちに死という裁きを下したと語られました。

イエスはたとえを話された。「ある金持ちの畑が豊作だった。金持ちは、『どうしよう。作物をしまっておく場所がない』と思い巡らしたが、やがて言った。『どうしよう。倉を壊して、もっと大きいのを建て、そこに穀物や財産をみなしまい、こう自分に言ってやるのだ。「さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができたぞ。ひと休みして、食べたり飲んだりして楽しめ」と。』しかし神は、『愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか』と言われた。自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ。」ルカ 12:16-21

またべつのところでは、金貸しに借金を帳消しにしてもらった二人の負債者の感謝の量、どちらの負債者のほうが金貸しを愛するだろうかとイエスは弟子に問いかけています。

イエスはお話しになった。「ある金貸しから、二人の人が金を借りていた。一人は五百デナリオン、もう一人は五十デナリオンである。二人には返す金がなかったので、金貸しは両方の借金を帳消しにしてやった。二人のうち、どちらが多くその金貸しを愛するだろうか。」シモンは、「帳消しにしてもらった額の多い方だと思います」と答えた。イエスは、「そのとおりだ」と言われた。ルカ 7:41-43

きょうの管理人は主人に謝っても許してもらえないと考えたのか、負債者に愛してもらうために策略します。ある人の借り、油 100 バトスは 50 に、またある人の借り、小麦 100 コロスは 80 にしました。ルカ 7 章の金貸しのたとえでいえば、管理人は「油 50 バトス分、小麦 20 コロス分」の愛を得たことになるわけです。

しかしここにはおかしなところがあります。7 章の金貸しは自分の金で感謝を買いますが、16 章の管理人は主人の金で自分の利益（再就職先の確保）を買います。わたしたち人間からすれば自分の金か他人の金かはおおきな違

いですが、でも主人（＝神）の視点からすれば細かいこと、誰の金だろうが金でさえあればいいようです。このたとえをうけてイエスはこうまとめます。

主人は、この不正な管理人の抜け目のないやり方をほめた。この世の子らは、自分の仲間に対して、光の子らよりも賢くふるまっている。そこで、わたしは言うておくが、不正にまみれた富で友達を作りなさい。そうしておけば、金がなくなったとき、あなたがたは永遠の住まいに迎え入れてもらえる。ルカ 16:8-9

非常識なはなしですが、でも聖書はこれが福音だと伝えています。告げ口によって不正を暴露された管理人が主人に赦しを乞うても許されそうにありません。また神に「罪の赦し」を願っても正義を重んじる神はとうてい彼を赦せません。それなら、許しを乞う相手を神から人に変えなさい、それが「この世の子ら」にとって抜け目ないやり方だとイエスは教えます。「この世の子」は「光の子」より賢いとまで賞賛されています。「この世の子」とは人間のこと「光の子」は天使かそれに似た者のことをさしています。当たり前のことですが、人間であるわたしたちは「この世の子」として振る舞うことしかできません。いい子ぶって「光の子」のように振る舞うことには無理があります。

管理人が神に気に入られた理由は不正な借金減額で友を得よう（再就職先の確保）としたところでした。もし彼が不正の隠蔽工作をすすめていたら神はそれでも赦したでしょうか。聖書にはエピソードはないので想像になりますが、そのときは容赦なく管理人は神の裁きを受けたのでしょうか。

引用したルカ 12 章の金持ちは自分のためだけに富を使おうとして神に裁かれました。ルカ 7 章では金貸しが金で愛を買った話が語られました。そしてきょうの 16 章では「不正な富で真の友を得よ」というムチャ話、これに続いてまったく真逆な話「小さなことに忠実であれ、他人のものに忠実であれ」ときわめてまともは教えが語られます。こんな矛盾した話がならんでは

聖書まともに聴こうと耳を傾ける者は困ってしまいます。わざわざこんな構成にしている狙いには「まとも」がまともでないことがあるということに気づくこと、これが大切だという教えもあるのでしょうか。上っ面のことば、見えているだけの行為の奥に「ほんとう」があるという教えが、語ることなく語られています。
